

平成28年5月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

青梅市内にある遺跡の現状その12

青梅市内を流れる主な川は、東京湾へ直接流れ込む多摩川と入間川に合流し、荒川へと流れる霞川と成木川が有ります。

今回はこの成木川本流沿いにおける遺跡の5か所を上流からご紹介をいたしました。今回と次回でこの成木川の支流、黒沢川と小布市川沿いにおける遺跡のご紹介を行い、市内全域における遺跡の紹介は終了といたします。

青梅市街から、通称『青梅坂』を下ると細い沢沿いに道は続きます。この道は小曾木街道と呼ばれ、道の左右を縫うようにして黒沢川が流れています。栃谷橋から900mほど進むと左側に聞修院というお寺が有ります。

遺跡とは直接関係しませんが、ここには市内では、現時点で一番新しい時代に作られたといわれる板碑が本堂内に保管されています。一般には公開されていませんが、碑面には、室町時代の天文十二（1543）年の元号が彫られ、全体の長さ165cm、幅45cmにも及ぶ大きなもので、昭和39年11月3日に市の有形文化財に指定されています。

N-15 このお寺から街道をさらに東へ3.3kmほど進むと小枕と字名と呼ばれていた地域が有ります。沢沿いに設けられた細い道を行くと、黒沢一丁目自治会館という建物が有ります。その建物の沢を隔てた西側台地がN-15の遺跡となっています。

この遺跡はちょうど両側に沢が流れており、その中央の山裾に位置しています。遠方からの地形の確認は可能ですが、お茶の栽培などで平地は利用され、空き地での雑草も多く、表面採集等による遺物の確認は不可能となっています。過去の記録によると、縄文時代後半の土器片や黒曜石のフレイクなどが見つかっています。

N-14 ホト沢遺跡と名付けられ、青梅市立第七小学校西側、山裾にある福昌寺の境域とその西側の墓地付近が遺跡となっています。

墓地造成の際に縄文時代中期の勝坂式土器や加曾利E式土器、石で囲まれた囲炉裏などが発見されたことが昭和33年の記録に残されています。また、そのほかでは、縄文時代中期前半の阿玉台式土器、縄文時代前期後半の諸磯式土器などが収集されています。

現在は遺跡となる地域全域が墓地となっており、区画ごとに点在する確認可能な墓域においても、遺物の確認はできませんでした。墓地も寺域も奇麗に整備されており、これからも表面採集等での遺物収集は難しい状況になっています。

N-13 JA西東京小曾木支店南側の中井大橋を渡り、すぐ右側から山に向かう細い道を南へ200mほど登った山の中腹に位置しています。道中、笹の群生から次第に孟宗竹の群生に変わり、一か所、墓地が残る地域が遺跡の西端となります。

ここから東に山裾がやや張り出し、傾斜した平地状となっています。現在は竹が生い茂り、耕地も荒れた状態となっているため、東側の段下からの地形の確認はできますが遺物の採集は不可能となっています。

遺物採集の過去の記録では、縄文時代中期後半の土器が数点採取されたのみということで、遺構そのものは有りのまま残っている可能性はあるものの開発と言う観点からは程遠い状況となっています。

N-12 古武士遺跡と名付けられた遺跡です。場所は『青梅市花木園』の北側に位置し、現在そこには老人ホーム青梅愛弘園が建っています。遺跡はこの建設に伴い、消失してしまいましたが、過去の記録を見ますと、縄文時代中期前半の勝坂式土器が採集されたことが記録に残っています。

N-16 小布市川上流にある長大な谷津田を南西に3,2kmほど進んだ左岸の丘陵尾根上に長者窪遺跡があります。現在は山林となっており遺跡の面影は全く確認できませんが、かつてこの地域が耕作されていた時、縄文時代中期後半の土器や玉類が採集されていたという記録があります。(最終回へ続く)

(文責 鈴木晴也)

